『論叢』玉川大学教育学部紀要　第16号　2017，pp. 61～70

［資　　料］

イギリス・ドイツにおける通信制大学の実際と本学の通信教育課程への示唆

田畑　忍・守屋誠司・魚崎祐子

要　　約

筆者らは昨年，イギリスとドイツの通信制大学を視察した。これらの大学では，遠隔地を結んだペア学修やグループ学修を行うことにより学生間の積極的な学びを促したり，ICTを効果的に取り入れた授業実践を行ったりしていた。また，通信制教育を地域や国境を越えた開かれた学びであると肯定的に捉え，多くの学生を獲得していた。本稿では，これらの通信制大学の現状を報告するとともに，本学の通信教育課程に取り入れることのできる実践やその時の課題などについて考える。

キーワード：通信制教育，セメスター制，ペア学修，グループ学修

Ⅰ．はじめに

筆者らは現在，大学における通信教育課程の学修指導で中心的な役割を果たしている，印刷教材等による授業における適切な授業モデルの開発を目指している[1)]。通信教育課程の学修指導には，面接授業，印刷教材等による授業，放送授業，メディアを利用して行う授業の4つがある[2)]。玉川大学の通信教育課程では，面接授業と印刷教材等による授業を行っている。印刷教材等による授業では，平成27年度より，学生の学びを支援するために，テキストの補助動画を一部の科目で試験的に作成，配信した[3)]。その結果，補助動画の視聴時期に関わらず，補助動画を視聴した時の方が視聴しなかった時よりも有意に合格率が高まることがわかった。また，「A・B・C（すべて合格だがAの評価が最も高い）・D（再提出［不合格］）」の評価の割合を確認したところ，補助動画を視聴した時はAの評価が有意に多く，Dは有意に少ないという結果であった。一方，補助動画を視聴しない時はAとBの評価が有意に少なく，Dが有意に多いという結果であった。補助動画を視聴した学生からは，「動画を見てレポート作成のポイントがわかった」「他の科目でも作成してほしい」などの声があがっている。補助動画を提供することにより，印刷教材等による授業において，従来よりも手厚い支援が可能になったと考え

所属：教育学部教育学科　受理日　2017年5月16日

られる。

国内外の通信制大学における先進的な取り組みを視察することは，印刷教材等による授業における適切な授業モデルの開発にとって重要である。そこで筆者らは昨年，ICTを効果的に取り入れた遠隔教育で先進的な実践を行っている，イギリスのオープン大学とドイツのハーゲン大学を視察した。本稿では，両大学の視察で確認した実践のいくつかを報告する。また，本学の通信教育課程に取り入れることのできる実践やその時の課題などについても述べる。

Ⅱ．視察した通信制大学

以下では，視察した通信制大学の概要について述べる。なお，以下で示している内容は視察当時の情報であるため，学生数などについては現在と異なる可能性がある。

1．オープン大学[4)]

1969年に設立されたイギリスの通信制大学。学生数は約20万人でイギリス最大。91ヶ国の学生が学んでいる。専任教員の他，学生の指導のためにチューターや非常勤講師などが多く在籍している。チューターは約6400人おり，一人のチューターが担当する学生は20人以下で，学生の満足度も高い。2012年度のイギリスのNational Student Surveyでは，学生の93％が「全体として自分の受けたコースに満足している」と回答し，92％の学生がチューターからの自身の受講結果に対する詳細なフィードバックに満足したと回答している[5)]。授業はブレンド型で行われる場合が多く，学生は授業動画の視聴やテキストでの学修（図1），遠隔でのグループ学修などで学修を進める。セメスター制を採用している。期間中には面接授業もあるが，面接授業に参加できない場合は，ALE（Alternative Learning Environment）という掲示板での学修に代えることも可能である。各教科の学修は，レベルに応じて学修を進めることができるよう

図1　テキストの例

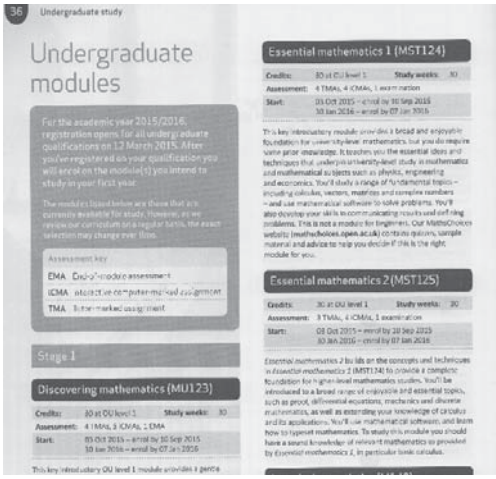

図2　科目の説明の例

図3　公開されているコンテンツの例

に設計されている（図2）。授業で利用するコンテンツの中には，BBC（British Broadcasting Corporation：英国放送協会）と協力して作成したものもある。“open to people, places, methods and ideas”をミッションとしているため，フリー素材としてYouTubeなどに公開しているコンテンツも多い（図3）。

2. ハーゲン大学[6)]

1974年に設立されたドイツの通信制大学。学生数は約7.7万人でドイツ最大の通信制大学。経済学部や法学部など4学部がある。ドイツ国内や東ヨーロッパなどに約30のスタディールームがある。教員はメールやチャットなどを利用し，担当する学生の個別サポートを行う。授業動画については5〜6年程度で作りかえている。また，LMS（Learning Management System：学修管理システム：ハーゲン大学ではMoodle[7)]を利用）への教材登録や，LMSでの授業設計については教員が各自で行う（図4，5）。多くの学生からの質問される内容については，各教員が研究室などで説明動画を作成し，LMSに登録することもある。また，テキストを読むだけでは難しい内容の理解を支援する補助動画も提供している。これらの動画については，「I. はじめに」で述べた，本学の補助動画と同様である。ハーゲン大学においてもブレンド型の授業が行われている。セメスター制を採用しているのもオープン大学と同様である。なお，ハーゲン大学では，本校やスタディールームで実施する面接授業以外に，ヴァーチャルクラスルームと呼ぶ300人が同時に参加できる遠隔授業を行うこともある。

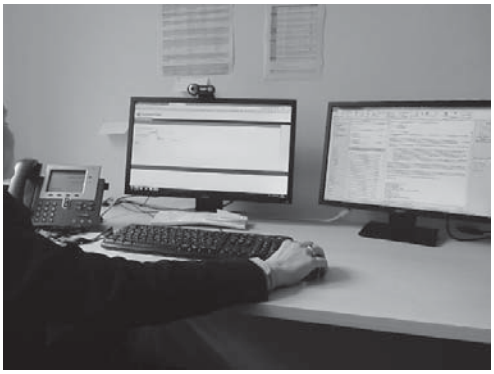

図4　LMSに登録する時の例

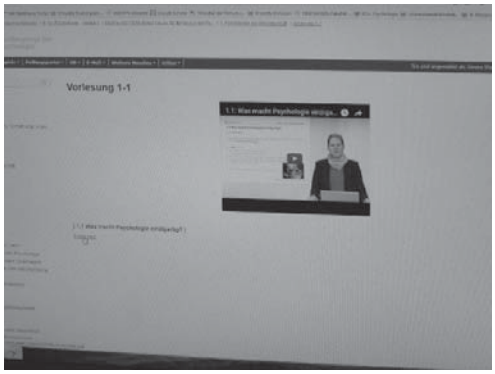

図5　授業動画を登録した時の画面の例

Ⅲ．本学の通信教育課程では取り入れていない実践について

以下では，視察した大学における実践の中で，本学では取り入れていない実践のいくつかを説明する。また, 本学の通信教育課程で取り入れる際に考えられる課題などについても述べる。

1．ペア学修

ハーゲン大学の心理学部では，遠隔でのペア学修を必須としている。Study-Buddy Program と呼ばれるもので，同じコースの新入生たちにペアを組ませる。誰とペアになるのかは偶然である。このプログラムを導入した初期の理由は，「ドロップアウトを減らすため」「学生の孤立を防ぐため」であったが，心理学部では将来，カウンセリングなどで誰とでも心通わせることが求められるため，無作為に振り分けられた人と関係を築き，うまくやっていくための訓練であると考え，現在も継続的に行っている。心理学部での成果を受け，他学部でも取り入れることを検討しているとのことであった。このプログラムは6週間で構成されており，最初の3週間は互いに質問をし合いながら関係をつくる。後半の3週間は，ペアで一緒に課題を進める。なお，大学では定期的にアンケートを実施し，ペア活動がうまくいっているのかをチェックしているが，大学は基本的にノータッチということであった。そのため，ハーゲン大学でも，毎年10％程度のペアがうまくいっていない。なお，学生はLMSのチャット機能やビデオ通話などを利用してペア学修を行う。ペア学修の課題については，以下の「2．グループ学修」であわせて述べる。

2．グループ学修

視察した両大学では，遠隔によるグループ学修を行っている。ハーゲン大学では，レポートの回し読みや相互評価，課題の途中経過の発表などをグループで行う。さまざまなレベルの学

生がいるが，お互いをリソースとして捉え，協力し合うことができているとのことであった。このような学び合いができる素地として，ドイツでは小さい頃から主体的に学ぶ訓練を受けていることが関係しているのではないかと思われる。また，以下で説明するセメスター制を採用しているのも，グループ学修を実施しやすい理由のひとつだと考えられる。オープン大学ではチューターを中心として，与えられた課題に対するグループ学修をLMS上で行っている。

面接授業で利用されることの多いペア学修やグループ学修を，面識の無い状況で，web上で実施することへの学生の負担は大きいと考えられる。ディスカッションに慣れていない日本の学生にとっては，文字のみで指摘し合うペア学修やグループ学修では意思疎通がうまくいかない可能性もある。もし本学の通信教育課程でペア学修やグループ学修を導入する場合は，「目的を明確にする」「必要に応じて教員が介入する」「コメントする際の不安を和らげる」ことなど，さまざまなフォローが必要になってくると思われる。また，本学の通信教育課程では，学生の受講開始時期がさまざまである。そのため，印刷教材等による授業でペア学修やグループ学修を行うためには，ペア学修やグループ学修の実施時期の設定などについて検討する必要もある。

3. セメスター制

本学の通信教育課程は，「いつでも学修を開始できる」「自分のペースで学修できる」というスタイルである。しかし，視察した両大学ともセメスター制を採用している。セメスター制を採用するメリットとして以下のことが考えられる。

1. ペア学修やグループ学修を取り入れやすくなる。
2. 教員が担当する各学生の進捗状況を把握し，助言などが行いやすくなる。
3. 学修の第一歩を確実に踏み出させることができる。

1については,「深い学び」「対話的な学び」「主体的な学び」を促すことが求められている中，通信教育課程で学修する学生にも，他の学生とディスカッションする場を設定することは重要であると考えられる。また，ペア学修やグループ学修を取り入れることにより，独学による寂しさを減らし，面接授業以外でも共に学ぶ仲間を見つけやすくなると考えられる。2と3については，ドロップアウト対策にもなる。筆者の一人は一年次セミナーの面接授業を担当しているが，学修をどのように進めれば良いのかがわからずに悩んだ経験がある学生の多いことに気付く。したがって，3への対策は重要であると思われる。小中高校の学びで，学校の設定したカリキュラムに沿って学ぶことに慣れている日本の学生にとっては，セメスター制の方が学びやすい学修環境と言えるかもしれない。

しかし，「セメスター制での授業設計をどのようにすれば良いのか」「担当する学生の進捗状況を現状のシステムでどのように把握するのか」など，導入に向けての課題も多い。本学の通信教育課程の場合，現行のアカデミックアドバイザー制度を拡大する方法も考えられるが，科

目等履修生も含めれば各教員が担当する学生数が多くなり，かなりの負担増となる。また，セメスター制を採用するのであれば，例えば一年次セミナーやガイダンスをさらに充実させることも大切になってくる。一年次セミナーでは，テキスト学修の進め方，LMSの利用法，レポートの書き方，本学での学び方，遠隔でのペア学修・グループ学修などの方法をしっかりと学修させる必要がある。また，一年次セミナーを対面授業で実施するのか，それ以外も可能にするのかなど，検討すべき課題も多い。

4. 授業動画の学内での作成

視察した両大学とも，授業動画などのコンテンツについては，そのほとんどを学内のスタジオで撮影・編集している（図6，7）。スタジオには専任の職員がいる。学生に提供する授業動画は10～20分程度のものが多く，科目ごとに複数の動画を用意している。教員によるが，ハーゲン大学でLMSの運用方法について説明をしてくれた教員の授業の流れは，「授業動画の視聴→テキストなどの資料確認→授業動画の視聴→小テスト…→グループ学修…→最終テスト」というようなものであった。

日本国内の通信制大学では，授業動画の撮影・編集を業者に依頼している所も多い。しかし，この方法では，運営経費が嵩むという課題がある。本学の場合は学内にスタジオがある。スタジオを有効活用すれば，運営経費の問題や数年ごとの授業動画の改修に対応できると考えられる。なお，本学の通信教育課程では，新しい学修方法としてブレンディッドスクーリングを2017年7月に試行する。ブレンディッドスクーリングではメディア授業を7コマ，面接授業を8コマ実施する。このうち，メディア授業で利用する授業動画については本学のスタジオで撮影したが，編集も含めて業者に依頼している。今後は，今回の経験をもとに，学内で独自に撮

図6　スタジオでの撮影の例

図7　編集画面の例

影・編集することができる環境づくりが重要である。

Ⅳ．LMSを利用したグループ学修の試行について

以下では，Ⅲで説明した実践のうち，LMSを利用したグループ学修の試行について述べる。ペア学修ではなくグループ学修の試行を検討したのは，グループ学修の方が「さまざまな意見を得ることができるのではないか」「意思の疎通がペアよりもしやすいのではないか」と考えたためである。

筆者のうちの一人は，通学課程の授業でレポートの回し読みをさせている。学生の作成するレポートは，ある本の一部を抜粋したものを読み，その要約と自身の考えを述べるものである。したがって，グループのメンバー全員が同じ課題のレポートを作成してきている。回し読みでは，ハーゲン大学のグループ学修と同様にレポートの相互評価を行い，レポートの内容について改善点や疑問点などをコメントとして相互に書き込む。学生はグループのメンバー全員に書いてもらったコメントを参考にレポートを修正改善して提出する。修正前後のレポートを確認すると，修正後のレポートの方がレポートとしての質が高くなっていることがわかる。Ⅲの「3. セメスター制」でも述べたが，「深い学び」「対話的な学び」「主体的な学び」を促すことが求められている現在，印刷教材等を利用する学修においても，学生にレポートに関するディスカッションの場を提供することは重要である。これにより，学生の提出するレポート課題の質が高まることが期待できる。

そこで，Ⅲの「4. 授業動画の学内での作成」で述べたブレンディッドスクーリングにおいて，面接授業前の学修課題としてLMSを利用したグループ学修を試行することとした。面接授業前の試行であるため，ハーゲン大学などで実施されているグループ学修と条件は同様である。試行では，メディア授業で学修した内容についてまとめたものを各学生が作成する。それを無作為に振り分けられたグループ内で回し読みをし，相互にコメントし合う。面接授業時にグループ学修に関するアンケート調査を実施する。また，LMSの掲示板での相互コメントを確認する。これらの結果を検討することにより，LMSを利用したグループ学修の効果と印刷教材等による授業での実施の可能性を確認する。なお，コメントをする際の学生の不安やコメントに対する責任などを考慮すると，ペア学修から始めてグループ学修につなげるシンク・ペア・シェアの方が良いのではないかとも考えられる。しかし，今回の試行では時間などの制約もあり，上記の方法で実施することとした。そのため，相互にコメントし合う際の支援として，今回の試行では，いつでも教員に質問できる体制で実施する予定である。

Ⅴ．まとめ

ICTを効果的に取り入れた遠隔教育で先進的な実践を行っている，オープン大学とハーゲン

図8　大学紹介時の例（1）

図9　大学紹介時の例（2）

大学で行われているいくつかの実践について報告した。今回の視察では，お互いの大学の概要などについて紹介した後，相手校の先進的な実践について詳しく説明を受けた（図8，9）。本稿で述べたとおり，視察した両大学にはいくつもの共通点が見られたが，上記以外にも，学生に対する手厚いフォローが印象的であった。また，日本では一般的に，通信教育課程は通学課程よりもさまざまな面で低く見られがちだが，両大学の教員は，「通学課程の場合は通える範囲の学生を対象とするが，通信教育はそうではないので学生を集めやすい」「学生にとっては，さまざまな国や地域の学生との交流が可能で得るものも多いはず」などと，通信教育での指導に対してポジティブに捉えているのが印象的であった。これらの大学を視察することにより，多くの学生にとって学びやすく，質の高い学修を保証することのできる印刷教材等による授業の適切な授業モデルを開発するための新たな視点を得ることができたとともに，通信教育の可能性についてあらためて考える機会を得ることができた。

なお，ハーゲン大学では，レポートの剽窃はほぼ無いということであった。この理由について考えると，ハーゲン大学では，評価は最終テストの割合が高く，それまでの授業動画の確認やレポート作成，グループ学修などは学びを深めるためのものであり，最終テストで良い結果を得るための過程と各学生が捉えているためではないかと思われる。このことは，レポートの剽窃に苦慮している私たちにひとつの示唆を与えるものであると言える。

本研究は，平成27-29年度　科学研究費補助金（15K04246，代表：田畑忍）の助成を受けたものである。

参考文献

1）田畑忍，守屋誠司，山口意友，魚崎祐子「通信教育における『印刷教材等による授業』の質保障を目指して」，日本教育工学会第31回全国大会発表予稿集，2015年，pp. 247-248
2）大学通信教育設置基準第3条：http://law.e-gov.go.jp/htmldata/S56/S56F03501000033.html（参照

日：2017年5月16日）
3）田畑忍，守屋誠司，山口意友，魚崎祐子，豊田修「テキスト学修を支援する補助動画の効果」，玉川大学教育学部紀要2016『論叢』，pp. 183−192
4）オープン大学HP：http://www.open.ac.uk/（参照日：2017年5月16日）
5）英国国立オープン・ユニバーシティMBA日本事務局：http://openuniversity.jp/about_ou/ranking/（参照日：2017年5月16日）
6）ハーゲン大学HP：http://www.fernuni-hagen.de/（参照日：2017年5月16日）
7）Moodle docs：https://moodle.org/（参照日：2017年5月16日）

Suggestions for Our Correspondence Education from Examinations of Correspondence University in the United Kingdom and Germany

Shinobu TABATA, Seiji MORIYA, Yuko UOSAKI

Abstract

We visited correspondence university in the United Kingdom and Germany last year. They conduct pair training and group learning that connect remote areas. And they use ICT effectively. They think positively that correspondence education is open learning. And they have many students. In this paper, we report the current situation of these correspondence universities. And we think about attempts we can do.

Keywords: correspondence education, semester, pair training, group learning